昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十二年九月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二二〇号）

慈光

第十九巻

第九号

目次

近角先生御法話
「世間虚仮・唯仏是真」……山田太平……(1)
愛書と求道……福島政雄……(7)
近角先生著『人生と信仰』③
夏の御文の私解……花田正夫……(11)
念仏のかおる人々……聚墨生……(18)
子を失った親に……ジャータカ物語……(22)

近角常観先生御法話

世間虚仮・唯仏是真

山田太平

（註）この御法話は、昭和十年八月十八日（昭和六年十一月三十日、求道会館創建紀念日、先生は突然脳溢血の発病、爾来静養せられました。この法話はそうした中での御講話であります）上京求道の際、会館での日曜講話の筆録でありますが、何度拝読しても、その度ごとに、先生の御慈懐に抱かれる思いがいたしますのでありまして、今は亡き先生をしのびまいらす時、特にこの感が深いのであります。

私は先生の御慈訓、御遺訓を、私だけで味わわせていただくのは勿体ない気もいたしまして、今度謄写にして一部有縁の方におわかちする次第であります。御味読下されば幸甚のいたりであります。勿論、先生の御校閲も得て居りません。文責は全部私にあります。

昭和十八年八月十日　　遺弟　山田太平　謹誌

（編者註）山田様もすでに亡くなられました。昭和二十四年十一月号の慈光誌に記載させて頂きましたが、山田さんの仰言る通り、何度拝読しましても心うたれあたらしくいただけますについて、再録させて頂きました。

今日はこの講題でお話させていただく次第である。これは聖徳太子が一代の間、文化のためにお尽くし下され、仏法僧の三宝興隆に御尽力遊ばされましたが、四十九歳で急に疫病のために亡くなられましたが、橘姫様が御追慕のあまり、太子の往生遊ばされた天寿国の曼陀羅の刺繍を作られその裏に太子の常の仰せとして、世間虚仮・唯仏是真と縫いとりせられました。日本三大曼陀羅といわれている大和の中宮寺に現存しております。

世間は虚仮である、唯仏のみが真である、と御示し遊してある。それで、これは聖徳太子の御信仰をよくあらわしてあるのであって、今日はその意味をお話して見ようと思うのである。

これを普通に申すと、世間一切、人生のことは仮のことである。つまらぬいやしいものである。ところが仏は美しいきれいな濁りのない方であるとあだかも黒い汚い水のはいった瓶と、美しい澄みきったきれいな水の盛ってある瓶とくらべたようにとるのであります。もしこのような考えからいうと、世間一切の事は、仮の世、濁れることばかりであるから、そんな世界を厭い捨ててただ真の仏の道が美しくきれいであるからと、世間を捨て家を捨てて山へでも入って念仏ばかり申すのがよいと遁世的になり易いのであるが、それではこの意味が本当に分っているのではありません。

全体まことと云うことは、そういうのがまことかと云うと決してそうではない。あの人はまことの人だと云う場合に、他人は悪をするが自分は悪いことはせぬ、他人は不正なことばかりするが自分は不正なことはすこしもしないのである、とただくらべて居るだけであっては、本当のまことの人とは云われないのである。

本当のまことの人と云うのは、悪いものだからと云うて捨てずに、悪い者をどこまでも同情して、善い人に感化しつくさずんばやまぬというまことを以て向う人がまことの人である。つまりまことならぬ者をどこどこまでも見捨てないというのが本当のまことの人というべきであります。

今、世間は虚仮なり、唯仏のみ真なり、というまことは人間は汚いものであるが、自分は汚れのない美しいものであると極楽で眺めているようなまことではなくて、人生のあくまで虚仮なるを知ろしめして、その虚仮なるものに向ってどこまでも無限の大慈悲をもって溶かしつくさねばやまぬという真実をもって向って下さるのが、仏のまことというものであります。

それで私共はその御真実を聞かせてもらうということが私共の信仰問題と、こういうことになるのである。それで人生は虚仮である、私共は相対五分五分で行きつまったところで仏のまことがひびくのであって、吾々人生相対五分五分の行きつまってどうにもしてみようのない者を、仏はどこどこまでも見捨てぬという絶対のまことをもってお救い下さるのが真宗の信仰であるから、この人生五分五分の行き詰りがないとどうしても仏のおまことが徹底せぬのである。

昔から真宗のお話を聞いている人達はてんではじめから私は罪悪深重の者であります、悪い奴でありますと申す癖があるが、そんなことではいくら聞いてみたところで、芝居になってしまって、何もならぬのである。角を立てて聞けというのがここであって、よく聞いて欲しいのはここであります。

私など自分は寺に生れ信仰は一角得たつもりで、宗門の

ために尽くすのである、友人のために尽くすのである、身命を犠牲にしても他人のために尽くすのが仏教徒であると考えてギリギリまでやってしまったのであるが、その結果はどうなったかというと、自分がこれほどまでやったのに、人がそれ程に思うて下さらぬのが何となく不足に感じだし、世の中がつまらぬものに思えてきて、大煩悶におちいったのであります。それからというものは妙に人をへだてることばかりになってしまったのであります。

その時ハッと気づかされたのは、さてこれは変なものである、元来自分は人のために犠牲の覚悟でやってきたのに人が思うてくれぬので不足を云うのは変ではないか。して見れば自分は人にみとめてもらいたいために名誉心でやっていたのであると気付いたのであった。これをお聞き下さる皆さんにしても大なり小なり同じ経験がありましょうから各々自分の問題として聞いてほしいのであります。

さあ、こうなると大体人に不足を云い、人に何かを求めなくては、自分の善なるものは成り立たない。人間の善なるものは、何かおつりを要求しているのであって、各人各人の立場から云うているよしあしであり、結局自分が相対五分五分の善であって、悪い悪いとなってしまって云いようのない煩悶になってしまいました。

それで結局がどう思うようになったかと云うに、この私が善悪で苦しみ、その相対五分五分をやめようとしてもやめられないのは、結局私の性質であるから

「そりゃ、そういうのが君の性質だ。僕は君の性質は十分知っているから、何なりと云いたまえ」

と、私の愚痴をどこどこまでも聞きいれてくれる、そういう友達がほしいほしいとなったのであります。しかしそんな愚痴のありったけを打ち明けられる友は人生には一人もなかったが、それが仏である。とわからせてもらって、だんだん安心させられるようになったのであった。それが仏のまことと申すものである。当時は、仏は慈悲のかたまりであると申し、又慈悲のかたまりが仏であると申した。

さて、ここでこの話を聞かれると、皆さんの中には、そういうように苦しまにゃあ、煩悶せにゃあ信仰に入れぬとおとりになるかも知れないが、それは大きな間違いであって、私の安心したのは、煩悶のためではなく、それを見て下さるお慈悲の上で安心させられたと云う点が肝腎かなめでありであります。

仏のまことと云うとは何であるかと云う先方の御親切、おこころをよく聞いてはじめてまかす気もおこれば安心することにもなるのであります。故にこちらの心をしらべることでもなく、こちらの態度を改めることによって安心するのでもなく、仏のおまことを聞かされるところでこちらが安心

することになるのであります。

よくこう信ずるのである、かく思わにゃいかぬとはじめからこちらが思うことや、御礼をいうことばかりにかかり切っても、いくらそんなことをやっていたかとて安心の出来るものではないのであります。

今度も地方からわざわざ上京なさって種々質問をいただいているのであるが、こちらの思い振りばかりが問題になっているようだが、これはよく注意せねばならぬ傾向だと思います。

全体、私共は丁度インキのようなもので、真黒の濁りのかたまりである。一点のインキが清い水をどれだけきたなく汚してしまうかわからない位の黒い濁りであるが、しかしそのインキに向って無限に清浄な水が注がれたらどうなるかというに、インキ自身からはすこしも清浄な水は出て来ぬけれども無限に清水を注がれたとなるとインキの用をなさずその性質を失うて、清らかな水になってしまわざるを得ないではないかと申すのである。仏のおまことと云うのはあだがもそれで、広大なお慈悲は一度や二度ではない、あの問題は同情したが、これは知らぬという程度のものでなくて、どこどこまでも清水にし尽さねばやまぬと云う絶対のおまことである。

「若不生者不取正覚（若し生れずば正覚をとらじ）」

というのはここである。汝を救済し尽くさざれば仏とはならぬというおまことである。かくの如きおまことにあいたてまつれば、恐れいってああありがたいとならざるを得ないのである。仏が吾々をどこまでもおあわれみ下さる御慈悲が絶対であるから、相対の私共が満足せしめられる故絶対の信仰と申すのである。こちらが偉そうになるのではない、借財で一銭一厘も返済することの出来ない時に、俺が引き受けたと云う人が現れて、いくらでもお金を出して下された時に、自分は昨日までは貧乏であったが、今日からは金持になったと力んでいたらどうか、それでは向うの親切は無視せられています。

とにかく広大な仏のまことと云うのはかくの如きものであります。親鸞聖人の和讃に、

本願力に遇いぬればむなしく過ぐる人ぞなき
功徳の宝海みちみちて煩悩の濁水へだてなし

とある如しであります。

こちらがそうなる力はすこしもないが、仏のおまことのために、こちらが呆れて恐れ入ってしまったのが信仰の徹底というものであります。つまり仏のおまことが、不実の私へ徹到して下さったのである。こちらはカラッポであるそのカラッポをどこまでも実（じつ）にして下さるのが、仏の真実であります。その無碍の仏力を和讃に、

無碍光の利益より威徳広大の信をえて
かならず煩悩の氷とけ　すなわち菩提の水となる
とある。こちらは氷の性、仏のまことは天の日光にたとえるべきものである。こちらは如何に冷やかであっても、それを憐れんで下さる御慈悲のために、とうとう融かされて、氷が氷の用をならぬ、信仰の水とならせてもらって、仏とさせて頂くと、こういう味わいであります。

これが平生の時、善知識のおしえのもとに一念発得のところである。そのとき前念命終（ぜんねんめんじゅう）であり、後念即生（ごねんそくしょう）となって、〈信の一念のひらけると同時に肉体の命を終らぬままに、心はかならず往生させて頂けるに間違いない位にさだめられる、編者註〉、いよいよこの身の臨終一念（いのちおわるなり）の夕べ、広大な仏の境界に往生させていただくのであります。

二年間ばかりこの求道学舎に居られた東大の学生が病死せられて、早や遺骨となって帰国せられることになったのでありますが、このように人生あてになるものとては一つもないのである。そういうあてにならぬ虚仮のところにありながら、虚仮のことばかりああこう云うているのが可哀相と思召して下さるのが、仏のおまことであります。そのおまことを平生の時に聞かせていただいて一念安心させていただくのが平生業成（へいぜいごうじょう）で、その御真実の力でいよいよ真実の報土へ往生させて頂き、またその上は還相廻向（げんそうえこう）の御はたらきをさせていただくのである。それは徹底信の反射と申すべきで、これ還相廻向と申すのであります。

こちらがいくらへだてていても、すこしもへだてて下さらぬおまことが無碍ということで、どのようにへだてても あくまでへだてたまわず、呆れたまわざる無限の御慈悲をもって向かって下さるのが「尽十方無碍光如来」と申されるのでありまして、十劫という遠い昔から、末の末の世までお照らし下さる次第であります。こちらは飽くまで有碍でさわりばかりであるが、この有碍をあわれみましますお慈悲であるが故に無碍光如来でましますのであります。

こうして皆さんの健康そうにしていらっしゃる姿を見て思うのでありますが、吾々はああこうと人生のことばかりに執着しているのであるが、何時、誰がどういうことになるか、私など一度死にそうになって、今やっとこうしておれ、この仏のおまこと一つで安心させてもらって往生させていただく次第であります。

美術・工芸・政治とあらゆることに摂政（せっせい）として日本の政治をおとり下され、仏法僧の三宝をかくまで興隆して下さった聖徳太子が、いよいよこの世を去られました、この時の人々のかなしみは大変なものでありましたが、ことに橘姫のおかなしみは深く、太子が御家庭で常に仰せられた「世間虚仮、唯仏是真」の一句を刺繍されて後世にのこして下さったのであります。

その御信仰は、親鸞聖人の
「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろすのこと、みなもて、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわしますとこそ仰せはそらいしか」
〈歎異抄の総結文〉
と仰せらるるお言葉と全く同一であって、和国の教主聖徳皇と仰ぐ次第であります。

磯長の廟窟の三尊一体の御文
大慈大悲本誓願　愍念衆生如一子
是故方便従西方　誕生片州興正法
我身救世観世音　定慧契女大勢至
生育我身大慈母　西方教主弥陀尊
真実真如本一体　一体現三同一身
日域化縁今已尽　還帰西方我浄土
為度末世諸衆生　父母所生血肉身

遺留勝地此廟窟　三骨一廟三尊位

を拝しても、矢張り広大なお慈悲の世界からあらわれたもう御尊容と讃仰おくあたわない次第であります。

◆

太子御追悼の歌

斑鳩（いかるが）の　富の小川の　絶えばこそ
吾が大君の　御名忘らえめ

みかみおす　たびさみ山の　あじ蔭に
人のもうしし　吾が大君はも

斑鳩の　この垣山の　さかる木の
空なることを　君にもうさな

太子讃仰歌

この世の春の夢殿は
雲こそ早く鎖（とざ）しつれ
富の小川の法（のり）の水
流れて尽きずとこしえに

愛書と求道

近角先生著「人生と信仰」③

福島政雄

〔社会問題と信仰〕社会主義について、近角師は「西洋では社会の生活問題が押しつまって、生活そのものが非常に苦しくなっているので、必然のこととして社会主義というものが起って来たのであるが、我国においてはまだそれほどに迫ってはいない」と言われ、それは家族制度によって緩和せられていると考えられている。

しかしその当時と現在とでは、我国の社会も変ってきている。終戦後、憲法や民法が改められ、家族制度というものもなくなり、庶民の生活は年々に窮迫して来ているので我国の社会主義も軽々に看過すべきものではないのである。

西洋では宗教と国家社会とが対立していて、中世においてはキリスト教の教会が権力を握っていたが、近世になっては国家社会が権力を握っている。教会は一つの勢力で、権力や富のかたまりである。それで社会主義から云えば教会は敵である。社会主義者と教会とが戦争的態度をとるので争いはやまない。西洋の社会主義は明らかに非キリスト教的のものである。教会が比較的にその職を全うしているところでは、社会主義の勢力は弱い。西洋で羨むべき社会は英国である。英国民は一つ一つをしっかりやる堅牢なる国民である。

西洋で社会主義が盛んにある中に立って、全然方向を異にして、全く精神上の問題としてこれを解こうと考えた人はトルストイである。全欧州の一明星として労働者の味方となっている。しかしその説は、人間に神となれと勧めるものがあって、理想は美しいが、実際上光を見出さない。自己が実験した信仰を与えないで、人間に神の如く行わせようとするのは無理である。

仏教はそれと全く態度や精神がちがう。

釈尊の如きは、社会制度を如何せんという問題についてではなく、先ず自分の精神上の問題、即ち生老病死の問題に強く入つて社会政策など考える余地がなくなつたのである。併し人間が真に精神上の問題に触れて探りあてた結果である涅槃寂静の妙味は、貧富の別なく、種族の如何を問わず、智恵あるもなきも、善人も悪人も、いやしくもこの人間界に生きとし生ける者は、皆味わわねばならぬ人生の最深の地盤である。この地盤に立って眺めるときは、人類は悉く精神的に相愛する兄弟である。この点から解き来るときは、人生のあらゆる問題は皆解き得るは必然であって、その一部たる社会問題も実にこの一点によって美事に解決せられたのである。

このようにして仏教の信仰の上においては、四海兄弟の立場となる。あらゆる世間の階級差別の間において、その差別をそのままにして置いて、それらの上に一つの恵みの泉が流れる。人種の異なる間にあっても、歴史の同じくない間にあつても、同じ恵みの泉に浴するのである。曇鸞大師が、同一に念仏して別の道なきが故に、四海の内皆父母兄弟なりと言われたのもこの故である。

釈尊の時代には、仏教の感化が深く人心に徹し、印度の人心に大なる融通を与えたので印度は非常の発達を見るに至った。然るに仏滅後千二百年頃に、サニカラアーチヤリヤという者が印度をまたバラモン教に化して、階級的思想を非常に頑固なものとした。その結果印度は今日も階級の差別が甚だしく、国勢が振わぬものになっているのである近角師は結論として次のように述べられる。

真の信仰の立場から言えば世の中に改良すべきことは山山ある。今までの社会主義は、経済上からとか、階級制度の上からとか、自分の利害の上からとか出来たのであるから、いかにも力弱くてならぬ。若し信仰の地盤に立つたならば、社会の秩序階級は成立して、しかも貧富貴賤相融和せる同朋主義を実行し得られる。ただ物質上の不満足から叫ぶのは好ましからぬことである。必ず信仰上から働いて行きたいと思う。今日の社会主義は物質的に外界にこれを求めずして、むしろ翻って自己の内心に仏陀の慈悲を見出して、その上に満足せずば、決して絶対の満足は得られぬ。

〔国家秩序と信仰〕という問題を次に述べられている。国家は常に単に食うて着て生きて居ればそれでよいのではない。しかし国家秩序の根本義には本来宗教の意味が入っていないものである。国家の仕事を直に宗教的団体が己が領域に入れることは間違いであるが、国家自身が宗教の役目を奪わんとするが如きも、やはり間違ったことである。

キリスト教で天国というのは、本来政治的でこれを宗教の意義に持ち来ったが、仏教は俗的人生を自覚して、全然宗教的光明を見出したところがその大いに異なる点である。

日本の過去の歴史で言えば、聖徳太子が精神上の問題に光を持ち来って日本の仏教が興隆したのである。それは西洋における宗教と国家との関係とは異っている。太子が宗教的意義をもって国家の上に働かれたのであるから、自ら十七憲法を制して、その第二に「篤く三宝を敬せよ、三宝とは仏法僧なり」といってある。この篤く三宝を敬うというのが土台となって、余の十六条が活動するのである。国家は勝手なことをすべきものではなく、民を安んじ他をたすけて精神上の光をあらわして行かねばならぬ。個人が信仰によって活動すべきが如く、国も自覚の上から動かねばならぬ。

聖徳太子は、すでに国家の自覚の代表者である。それで太子にあっては、朝廷の政治を仏に代って行うとか、仏の命令であるとかいうのではなく、仏意を信ずる上から政治を為すのである。西洋の方の如く、神の意志を代表して政治を為すとか、甚だしきは神の名によって戦争するのとは全くその意義を異にしている。仏教にあっては、上歴代の天皇も信仰者として仏に帰依したまい、下万民もまた仏に帰依して、その間に差別はない。君主が仏に代って権威を行うという風に宗教の意義を政治の上に混ずることをせぬそれで今日の我国も、どうか信仰の光に救われて、信仰ある政治家、信仰ある実業家が輩出するようにありたいものであるということが近角師の念願である。

「世界宇宙と信仰」世界宇宙と言えば、今日は人類が宇宙研究という点において、著しく進歩して、次から次へと新活動、新発見が行われている。月の世界までの旅行も数年後には実現せられそうになっている。この世界宇宙は秩序が整然として、日月は運行し、春夏秋冬の四季も秩序正しく循環している。しかしながらこの世界宇宙そのものに宗教的意義はない。如何に秩序正しく美しくあっても、それが神の為すわざであると考えるのは間違っている。社会国家そのものに宗教的意義がないのと同じく、世界宇宙そのものに宗教的意義はないのである。

世界宇宙も無常変転しているものであり、人間に生老死の変化があると同じように、世界宇宙にもやはり変化がある。花が咲いても鳥が歌っても、そこに直に信仰の光は見出せぬ。この世界は一つの迷界の現象に過ぎない。然るに仏教者と称する人の中にも、この変遷無常の宇宙の上に仏陀を認めるというものがある。宇宙は無限であるという、この無限という言葉を、直に絶対という言葉と連想し、哲学という名のもとに神と仏と天と本体という言葉を混同して、世界の実在といい、統一せられた思想のように考えられている。これが非常な誤りである。このような考えの哲学は、信仰それ自身の上に無関係である。このように述べ来って、さて世界宇宙と信仰という問題の帰結について近角師は、次のように述べられる。

我等すべからく宇宙世界を捨て、我身をも捨てて仏の御手に投托すべきである。一切を抛擲して仏陀の慈懐に入るとき、真に永遠の生命が得られるのである。人生百年仏陀慈光の中に逍遥して、さてこの一生を終るときに、極楽無為涅槃界に入ることに定まれば、悲しむべきことはなくなって来る。先立てるものもこれに会し、後れたるものもここに会す。あくまでも喜ぶべきことである。しかしてまたその極楽に至れば、永くそこに止まるのではない。目ざめた者は眠るものを呼醒まさずに居られぬ。そこでこの人生へ還り来って観音の三十三身の如く、種々に神通方便をあらわして人天を済度することになる。

これがいわゆる薗林遊戯地門である。

「煩悩の林に遊んで神通を現じ、生死の園に入って応化を示す」

と嘆詠なされた。実にこの世界は、あくまでも煩悩の林であり、生死の薗であるが、この煩悩生死の薗林が、また仏菩薩往還の巷である。

阿弥陀仏は報身の形を現わして人生を救い、釈尊は応身として人間相応の肉身を取りてこの人生にあらわれて、この仏陀救済の徳音をのべ給うた。遠く二千年の古ばかりでなく、今日とても仏陀は種々無量の応化身を現わして或は童男童女となり、或は執金剛等の姿をもって救いを垂れて下さる。即ち応化身である。これみな仏陀の光である。

（人間と真理十三巻六号所載）

任田智見師法語抄

中島彰悟師、撰。

十劫成仏の弥陀か、久遠の弥陀如来か。それは御本書の上では明らかでないが、聖人の御晩年はますます御反省が深まらせられ、曠劫流転の久しきを思い浮べられて、十劫以来の御憐みぐらいではなく、久遠劫来の善巧の方便があればこそと、御自省の深重なお感じが、久遠の弥陀をあこがれたまうことになったのである。

○

信心は如来の決定心から発起す。如来の御手まわしの丈夫さを聞け！

夏（げ）の御文（おふみ）の私解

花田正夫

①そもそも今日の聖教を聴聞のためとてみなみなこれへおより候ことは、信心のいわれをよくよくこころえられ候て、今日よりは御心をうかうかとおもち候わで聞きわけられ候わでは何の所用（所詮）もなきことにてあるべく候。そのいわれを只今もうすべく候。御耳をすましてよくよくきこしめし候べし。

夏の御文は蓮如上人八十四歳の五月下旬に作られましたが、この年の春からお病気勝でお粥ばかりをすこし食べられる有様、翌年三月には往生されました。老衰のいよいよ身にせまられる中に、有縁の人々の一人でも信をとれかしとの切々とした悲心のあふれる御文であります。ことにこの一節に、今日のとか、今日よりはとか、只今と云うように、今、今が繰り返されてありますのも、上人が常々に「仏法は今日ばかりと思うべし、昨日は過ぎ行き、明日は来たらず」とも「出る息入るをまたぬ」とも仰せられましたが、御自身の余命いくばくもなしと自覚されての仰せとして、文字通り捨て身のお言葉であります。

これと云うのも、私共が無常を何時も遠くにおいて、薄氷上の乱舞に等しい生活を悲憫されての老上人のやるせない御勧めであります。

「聖教の聴聞」ということは、御晩年に大阪の御坊の参詣者が五人十人と寄ると、上人の御心にかなった聖教を抜き書きされて、人ずてに聴聞させられました。参詣の人々もこれを喜んで帰るという有様でしたが、これを上人もよいことを思いついたと非常に喜ばれて、其後ずうと続けさせられました。

ところが私共は「手ですることを足でする」ように恩にも馴れ、所謂「耳馴れ雀」になり、鹿の角を蚊がさしたほどにも感じなくなり、唯形式化してしまうものであります。

そこに「今日よりは御心をうかうかとおもち候わで」と聞く者の居住まいをまずただされました。

そして「信心のいわれ」をよくこころえよ、と肝要点を指適され、そうでなければ、何のための聴聞やら無駄事に終るぞといましめられるのであります。

「只今申すべく候、御耳をすましてよくよくきこしめし候べし」と次にとっておきの御言葉、上人八十年間、錬りに錬り、これ以上一言半句もとりかえようのない弥陀仏の本意をそのままの上人一流のお勧化がはじまるのでありますが、それについて「御耳をすましてよくよくきこしめし候べし」と、聞く者に御注意下さるのであります。

これと云うのも、自分の心でどれほど苦心し、どんなに堅く思いかためても、自分のたおれる時、心の変わる時には動揺し崩壊してしまいます。真実の宗教のかなめは、こちらの心で作る自力の信心ではなく、仏心のまことを聞いてそこに自然にひらけてくる大信心にあります。

水の上に数かくよりもはかなきは み法をはかる人にぞありける、

良寛

あれこれとみ法をはかることの空しさを憐れまれて、「そのいわれを只今お話し申そう、お耳をすましてよくよくおききなさい。」との仰せであります。

釈尊の御在世の晩年に王舎城の大悲劇がおこり、悲歎に沈んだ韋提希夫人も釈尊の御慰問を蒙ってようやく愚痴の涙の中からも西方弥陀の浄土を願う心がおこった時、釈尊はこれからそこに往生出来る道を説こうとされて

「諦聴（あきらかにきき）諦聴（あきらかにきけ）善くこれを思念せよ云々」

と告げられましたが、蓮如上人のこの思召しと全く規を一つにされるものがあり、その尊厳さに心うたれます。

先年亡くなられた沢木興道禅師が「心にしこりのある人には仏法はきこえぬ」と告げられましたが、心のしこり、とは、おのが智慧才覚をたのみ、われよしとするこころであります。それをさきだてて聞く時は、仏意を取りおとして身勝手なものになってしまいます。そのしこりを先ず蓮如上人は払われたのであります。

道綽禅師は安楽集に、説聴の方軌を述べられて「説く者は医王のおもいをなせ、聴く者は大病人と思え云々」とあります。大病を抱えた者が医王の前に出る時は、医王の言葉がそのまま死活の大事であります、大丈夫引き受けた、ときけばもうかえす言葉はありません。このような心でできくことが大切であります。

②夫、安心と申すは「もろもろの雑行をすてて一心に弥陀

如来をたのみ、今度のわれらが後生たすけたまえ」と申すをこそ、安心を決定したる行者とは申し候なれ。

さて上人はここで信心のことを安心と述べられました。信心とはまことのこころ、安心とはやすきこころでありまます。これは別なものでなく、仏のまことをきかせて頂くときやすきこころにさせて頂けるのであります。讃仏偈に吾誓いて仏を得んに、あまねくこの願を行じ、

一切の恐れ懼れる者のために大安を作さん。

とありますが、私共の日々の生活は事毎に恐れ懼れております。西洋の哲人が「微風にそよぐ葦」と私共の心の弱さをたとえましたことも至言だと思います。

一例をあげますと昨年は丙午の年でありましたので出産率が非常に減り、今年は妊婦を到るところに見受けますのも、丙午の迷信にびくづく人間の弱さによることです。丙午は中国の五陽説に、丙も午も陽気で火に相当するというのでその年は火事が多いという迷信が流行していましたのが、百年程前天保年間に唯今のように女の人の迷信となってしかも沢山の人々をおびやかしているのであります。

又十三の数はキリストの処刑された日として西洋では忌みきらう数と聞いておりましたが最近では日本でも同じ迷信が流行しております。

これらは皆、死を恐れ禍を懼れる心からおこる迷信で、平素無事な時には笑い話でおわるのに、不幸が続くとか、病人が出ると、不安な感情から迷信に走るのであります。「幽霊の正体見たり枯尾花」とは昔からよく言われますが暗夜に白い物のゆらぐのに幽霊かとおそれた人も、枯尾花の正体を照らされると、おそろしさは消えます。信心の智慧によって恐れ懼れる心が解消せられるのは自然のめぐみであります。

「もろもろの雑行をすてて一心に弥陀如来をたのみ、今度のわれらが後生たすけたまえと申す」

蓮如上人御一代の勧化の中心はこの一句におさまります水火二河の白道の旅人に釈尊の弥陀に帰せよとの声がひびいておりますが、上人がその玄意を聞きとられての仰せであります。

さて法然上人は、雑行を捨てて正行（南無阿弥陀仏）に帰せよ、と仰せられ、親鸞聖人は、雑行を捨てて本願に帰せよと勧められます。それをあわせて蓮師は、雑行をすてて一心に弥陀をたのめ、と仰せられるのであります。

先ず法然上人のお勧めの根本は、上人自ら四十三の御時まで一切経を五回も読み破られ、あらゆる行法を修行せられていよいよ我身の愚かさと拙なさを知られ、十悪・愚痴

の身の救われる道はお念仏一つとの善導大師の指南を頂かれて、一筋に南無阿弥陀仏の正行に帰入せられました。雑行のうちには布施・戒律・禅定・精進等々の菩薩の行も、人生の実相・苦・集・滅・道の諦観等々の声聞の行も、更にそうした成仏の直接の道でなくて人間としてあるべき道徳慈愛・孝行等々の世間善も含まれております。それがつまらぬというのではなく、その道を徹底して実行する力が無い身、智目行足を欠く身には、その道は不可能であります丁度どんなに美味の食物でも胃腸の悪い重病人は消化する力がありません、そこには滋養のたっぷり入ったお粥だけが唯一の営養となります。ここに法然上人は、美味な雑行に目をかけず念仏のお粥を食べよ、との御体験にもとずく御導きを示されました。

親鸞聖人は法然上人の導きをうけられて「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとよき人の仰せをこうむりて信ずる外に別の子細なきなり」と伝承せられましたが、法然上人の勧化によって念仏申す人々は沢山ありましても、その念仏が律法的な、形式的なものとなって、親から物をもらっても親心をとりおとし易いように幸にも念仏を申しながらも本願の意趣をとりおとすひとの多いのを憐れんで、本願を信じ念仏申せと、本願に帰することを中心にお導き下さいました。

以上両師の伝統をうけつがれた蓮如上人は、雑行をすてて弥陀をたのめ、との仰せであります。

しかも蓮師の最も特長とされますところは、「今度のわれらが後生たすけたまえ」の一句にあります。後生とはのちの生であります。さて現在は過去の業因の結果でありますが、未来は過去と現在のまいた種のあらわれであります。ところが私共の為すこと思うことのすべてが煩悩の所為でありますからその当然の結果は地獄は一定であります

ここに蓮師の仰せをくだいて申しますと

「煩悩具足の我等は地獄より外行きようの無い身でありますが、弥陀一仏ばかりは、そのことをかねて知りつくされて、本願をおこして下された方でありますから、ひとすじに弥陀仏を信じなさい。地獄一定の身をお助け下さるのは弥陀一仏ばかりであります」

との仰せであります。その弥陀仏の御真実を知らされるところに自然に信心は決定されるのであります。近角先生はこの一念のこころを、姥捨山の歌

奥山に枝折り枝折るは誰がためぞ親の身すててかえる子のため

でお教え下さいました。山に老母を捨てに行く途中、母はしきりに枝折りをする。子は姥の帰るための枝折りと思い邪見にあつかいますが、いよいよ捨てて帰ろうとしますと

その枝折りは、親の身を捨てる鬼の自分のためと知らされ、はじめて親心にめざめるのであります。「他力の悲願はかくの如き地獄一定のわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆる」とは、この安心決定の味わいであります。そこにたのもしさを基盤とした信の生活が始まるのであります。

③このいわれをしりてのうえの仏恩報謝の念仏とは申すことにて候なり。されば聖人の和讃にも「智恵の念仏うることは法蔵願力のなせるなり。信心の智恵にいりてこそ仏恩報ずる身とはなれ」と仰せられたり。このこころをこころえられ候わんこと肝要にて候。

蓮師の御勧化には三つの柱があります。一つは一心帰命、二つには称名報恩、三つには仏法無我であります。第一は前に述べましたがここでは称名報恩、仏恩報謝の念仏ということを仰言るのであります。これと申しますのも、蓮師の時代には自力の称名がさかんで、親鸞聖人の御教が地を払うという有様でありました。念仏を数多く称えてその力で浄土に生れようと願うのでなく、本願を信じてそのよろこびの上の念仏こそ真宗の真面目であるとお示し下さったのであります。

さて私共が日常に御恩とかお蔭とよく言いますが、その殆んどは自分の煩悩の満足の時に云いますけれど、一度それが反する時にはかえってうらみにくむ心となります。親をも子にとっては火鉢扱い以外には出られません。冬に調法がある火鉢も夏は邪魔物となります。こうしたことは報恩でも何でもありません。

真の報恩は私共の利害を越えたものでなければなりませんが、かかる恩の知れはじめは信心の智慧にはじまります

信心の智慧とは、私共が真の全理解者、仏のまことが心にふれる時、猛り狂う心もおのずからおさまり、すなおな心に転じ、そこに智慧の眼がひらかれて、明るい世界が展開してくるのであります。

最近或婦人が来られて「七・八年前に歎異鈔を教えられて自分でも読み、お話も聞いたけれど一向にわからなかったけれど、昨年の末、末の子を亡くして、その悲しみの底に立ってはじめて親鸞聖人のお言葉が身にしむようになりました。それにつけましても、母親の信眼をひらいてくれた子は本当に親孝行者でありました。」と念仏裡の述懐をききました。さき立つ子を善知識と拝み、親孝行者よと讃える智慧こそ、全理解者にあう者に自然に知らされる御恩の心であります。

この智慧は私共の持ち合せわのものでなく、よって来るところの遠く深い法蔵菩薩の本願力によるものであります

ここに、着た衣服をよろこぶのでなく、素裸のなり、人間に生れたことをよろこぶ、源信僧都の法語の「夫れ人間に生れること大きなるよろこびなり云々」のよろこびであります。私共は幸に生れがたい人間に生れ、聖人のみ教の地を潤おす日本に生れ、念仏のお粥に満服させて頂くことは、誠に無上の幸慶であります。しかも私共が賢いとか善人だということでなしに、愚かに拙い身に念仏成仏の一道をひらいて下さったことは御恩の頂上であります。

こころもよ言葉も遠くおよばねばはしなく御名をとなえこそすれ　良寛

それかと云って念仏者がいつも御恩をよろこんでいるかと云えばそうではありまもん。御恩は忘れ勝でありますがそのよろこぶよろこばぬにかかわりのない、否むしろよろこぶ心をおさえて喜ばせない煩悩具足の身にこそいよいよ摂取の御光は常に照らし護って下さるのであります。

はかりなきめぐみにいきる我が身なりめぐみのほかにわれあらめやも

慈悲しらぬままにめぐみにめぐまれてめぐみのほかに生けるわれなし

御慈悲にめぐまれながらみめぐみを知らざるままにみめぐみに生く

目覚めなきさとりも分かぬ盲人のただ御慈悲にみちびかれつつ　「病床遺稿」　臼杵祖山

右は臼杵老師のお味わいであります。

④それについては、まず念仏の行者、南無阿弥陀仏の名号をきかば、ああはやわが往生は成就しにけり。十方衆生往生せずば正覚とらじとちかいたまいし法蔵菩薩の正覚の果名なるがゆえにと思うべしといえり。また極楽という名を聞けば、ああわが往生すべきところを成就したまいにけり、衆生往生せずば正覚とらじとちかいたまいし法蔵比丘の成就したまえる極楽よとおもうべし。また本願を信じ名号をとなうとも余所なる仏の功徳とおもいて、名号に功をいればなどか往生をとげざらんなんど思わんは悲しかるべきことなり。

ひしと我等が往生成就せしすがたを南無阿弥陀仏とはいいけるという信心おこりぬれば、仏体（名号）すなわちわれらが往生の行なるゆえに、一声のところに往生を決定するなり。このこころは安心をとりてのうえのことどもにてはんべるなりとこころえらるべきことなりと思うべきものなり。　明応七年五月下旬　あなかしこ〳〵

親鸞聖人は教行信証の信巻のはじめに、称名念仏してい

ても心に暗いところがあり、願いが満たされないのは、名号のいわれをよくききひらかないからである。即ち如来は実相身、すなわち智慧きわみなく慈悲も限りない方であると知っても、それは為物身、すなわち迷い苦しむ私共のためにあらわれた方と知らないからである、と曇鸞大師の教を引用していられます。

蓮如上人はこの思召しをそのままに南無阿弥陀仏の名号をきき、極楽という名を聞けば、私共の往生成仏の道は成就し私共の往生すべきところも成就して下さっていると思いなさい、とねんごろに教えられています。

それであるのに、本願を聞き、名号を称えていても、それが私共のための本願であり名号であるのにそこを知らずに、他人仏の功徳と思って、そうした立派な名号を称えればその力できっと往生が出来るであろうなどと思っているのはまことに歎かわしくも悲しいことであります。

「ひしと我等が往生成就せしすがたを南無阿弥陀仏とはいいけるという信心おこりぬれば」と、私共の往生をかけものにして成就して下された南無阿弥陀仏でありましたかと気づかせて頂き、名号のひとりばたらきで私共を浄土に生れさせて下さることよ、ああありがたい南無阿弥陀仏と称えましょうと思い立つこころのおこるとき、慈悲の光明の中におさめとられて間違いなく往生させて頂けるのであります。

最後に「このこころは安心をとりてのうえのことどもにてはんべるなりとこころえらるべきこと」とありますのは蓮師が四十年の間読みに読まれて何度も綴りの糸を修理され何度読んでも常にあたらしく教えられて読み飽くことのなかったと仰せになった「安心決定抄」の中から第四節は御教化下さったので、その安心決定抄のこころは、信心決定してのちにこれを見るようにとの仰せであります。「信もなくて大事の聖教を所持するのは幼い者につるぎを持たせ候様に思し召し候」とは蓮師が常日頃に御注意下さるところであります。

完　了

不問語

清水凡禿

さる見識を持った骨薫屋さん云く。

「物の真偽がどうしても判別のつかぬ時は、まずその物を一生県命に毎日眺めていて、さて一たん箱か何かに入れておき、何日か目に取り出して見て、なお倦きが来なかったなら、大抵真物である」と。

矢張り真物には倦きがないらしい。

○

死！これぱかりは厳粛な事実だ。これにはごまかしがきかない。お葬式に逢う度にうかつな、ややもすればしだらのない自分が省みられ、我が師に逢った様な気がする。尊いお姿と拝まざるを得ない。

念仏のかおる人々

聚墨生

御一代聞書、第九十六章に、

「聖教よみの仏法を申したてたることはなく候。尼入道のたぐいのとうとやありがたやと申され候をききては、人が信をとると、前々住上人（蓮如上人）仰せられ候由に候。何もしらねども、仏の加備力の故に尼入道などのよろこばるるをききては、人も信をとるなり。聖教をよめども名聞がさきにたちて、心には法なき故に人に信用なきなり。」

○

近角先生の滋賀県の御自坊の近くでよく聞法していられた老婦人がありました。その方は子供のある家に後妻として嫁ぎ、何かと家をうまくやろうやろうと努力せられたけれど、人間の力には限りがあり、苦悩のすえに寺参りを思いつきました。はじめの間は何もわかりませんでしたが段々と法話もわかるようになり、ありがたい心もおこつて、何時の間にか一角の信者になりすましておりました。

そうした晩年のことでありました。近角先生が信界建現誌を発行され有縁の人々に頒かたれました時、その婦人は文字が読めないので御主人に読んで貰って、それを聴聞して喜んでおりました。ところが或年の建現誌に「自分によいと思うことがある人はよく気をつけねばならぬ」という意味が説かれてありました。

その夜のことであります、寝床に入って自分に何かよいことがあるかと考えて見ましたが、何もない、しかし唯一つ、自分は愚かで悪い人間であるが信心だけは、と大いにたのむものをもつていたことに気づいて、これが間違いであった、手作りの信心であったと驚き、それからはしこりのない、信者ぶることのいらぬ信者となり、今まではお寺かお内仏に参らぬとあえなかった仏様が、台所に居ても野良に出ても何時でも何処でも御一緒下さることを喜ぶようになりました。そこで自分で東京の先生にお礼に行きたいが文盲の身の悲しさで御伺い出来ぬので、御主人に代って

御礼をたのみました。その時、御主人は事の次第を先生に語られたのち「どうやら信心は家内にさきをこされました」としみじみ述懐された由であります。（常音先生より）

この老婦人こそ「聖教よまずの聖教よみ」と蓮如上人が讃えられる人であります。その一文不知の信者の「あらとうとやありがたやと称うる念仏」をきいて、御主人はじめ四囲の人々が自然に信にめざめられるのであります。

○

岡山医大の生理学の故生沼曹六教授が、いつも一つ話のようにくりかえされましたことは、

「私は北陸の生れであるが、私の郷里に身寄りもない老婆がいた。何時も念仏申して働いていたが、爪に火をともすような生活の中からすこしずつ貯金をし本山の報恩講には、参詣の誰かに托して懇志を納めていた。或時青年の一人が、お婆さんそんなに倹約して、美味しいものもたべずにためたお金を本山にあげても、今時の坊さん共は祇園で酒をのみ遊びにつかってしまうよ、やめてしまいなさい、とからかった時、お婆さんは、このお金がどんなにつかわれてもそれはかまいません。わたしはこうして働かせて貰うことがありがたいのです、と云って一向に取りあわなかった。

花田君、こんな信者が居るんだよ、そういう人にあうと仏様の心が自然にかようて来る云々」

という実話で、私の心に刻まれていて、折にふれて思い浮ぶことであります。

○

又摂津の富田市に住んでいられた人で、もう三十五六年前のことでありました。その方は以前は人力車夫をして聞法していましたが、時代の進歩で自動車時代となって廃業し、その後街の清掃屋となって荷車を引いて塵埃あつめを業としてました。

或時富田に行きました、すると、塵埃車を止めて私の方へ走って来る人があり、近づいて見ますとかねてからの顔見知りのその小父さんでした。そして汗を拭き拭き語られましたことは、

「私は仕事が無くなりましたが、今では街の清掃の車をひいて働かせて貰っております。毎日家々の塵埃を集めながら、ことに夏場ともなればキタなく、臭いのですが、それにつけても一切衆生の罪業を荷って下さる阿弥陀様の御苦労をしのび、念仏させて頂いております。時には仕事が手間どって、風呂にも入らぬままにお内仏の御礼をすることもありますが、仏様こんな汚れた身で済みませんと云うと、だいない、だいない、と仏様が仰言って下さいます。ありがたいことです、南無阿弥陀仏々々」

と念仏諸共の物語りでありました。私はその時、この方は街の塵埃を除くばかりでなく、この人の存在こそ富田の町をあかるく照らす灯火であり、人々の心を洗う法水の撒布者である、と心を強く打たれました。その念仏者の中にあふれる法水が、私の心の垢をも限りなく洗除して下さるのであります。

○

法然上人が、智慧第一の法然房とも、文珠菩薩の化身とも仰がれながら、御自身は愚痴の法然房、白黒もわかぬ盲者と常に仰言りつつ、念仏を一筋によろこばれましたことが思い浮びます。

その上人は「学生物識りの法文沙汰」する人をあやぶまれ、田舎の人々の物をもしらぬ人々があら尊や、ありがたやと喜ぶのを見て、「芽出度く往生する人よ」と拝まれました故実も心をうつことであります。

「たとい一代の法よくよく学すとも一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じて、智者の振舞いをせずして、ただ一向に念仏すべし云々」

と御臨終近くにあたってお勤め下さったことの今更に尊ばれることであります。

○

又小釈迦と称えられた源信僧都が出家されて間もない頃人々から非常に賞讃された時、僧都の母君がきびしく

「男子はお前一人であるのに、出家を許して叡山にのぼらしたのも、母をはじめ、あらゆる世の人々を渡す船となれと朝夕願っているのに、世渡り僧となることの悲しさよ！」

と機の糸を絶って叱られ、その後僧都は山深い横川に隠退されてひたすら仏道を学び、何時も居室に「名利」の二字を掲げて拝んでいられた逸話は襟を正さしめられます。

○

又京都の永観律師は非常にすぐれた方でありましたが、生来病弱のために、名利の学問に走られずに、ひたすら仏道を求められました。その律師は「病もまた善知識なり」とよく申されました。すぐれた素質と、明晰な頭脳を持たれて学問の世界に進まれますならば世にまれな学者にはなられたでしょうが、仏法者とはなられなかつたことでしょう。

○

さて以上の方々と違って、仏弟子中に愚者として有名なのが周利槃陀伽であります。彼は兄と共に出家しましたが性来愚鈍な槃陀伽は一句の法文も暗記出来ず、遂に兄からも愛想をつかされ、寺から追い出されました。身から出た

錆とは云え、帰って家業を継ぐ力もなく、それかといつて寺にとどまることも許されず、門前にたたずんで「どうしようぞいのう、どうしようぞいのう」と泣くばかりでしたさて仏陀はその悲しみの声を聞きとられて、槃陀伽の前にお立ちになり

「槃陀伽泣くんじゃない。悲しまんでもよい。愚かなくせをしながら賢いと思っている者が真の愚者である。愚かな者が愚か者と知ることは正しい智慧である。お前は正しい智慧を持っている。これからは箒を持って、精舎を掃きながら『塵を払わん、垢を除かん』と繰り返して行け！」

と誨えられました。それからは一筋に仏陀の教を守って同じ言葉をくりかえしくりかえしして居りますうち時節が到来して

「垢とは煩悩の垢である、塵とは罪業である。この身をこそ憐れまれて、払わん、除かんとかかりはてて下さる方こそみ仏にまします」

とさとつて、仏弟子の中でも非常に特徴のある人として尊ばれました。

この槃陀伽こそ、愚鈍な私共に大きな導きの手をさしのべて下さる方であります。

○

子を失うた親に

ヂヤータカ物語

お釈迦さまが祇園精舎におわせられました時のことであります。かねてから仏様に帰依していた一人の長者が、天にも地にもただ一人の子を病気のために失いました。彼は悲しみのあまり入浴することも、食事をすることも忘れ、家業も手につかず、お釈迦さまにお供え申すことも怠ってただ

「わしの可愛い子はわしを捨てて死んだ。わしより先に逝ってしまった」

と云い続けて泣き悲しんでおりました。

折しもお釈迦さまは朝早く大慈悲の御まなこをもって世界を眺めたもうて、かの長者が仏道に入る宿縁の熟していることをお見抜きになりました。そこで翌日托鉢に行かれ御弟子の阿難をしたがえてその長者の村にお歩みをはこばれました。

彼の家の者達は御座をもうけて仏様をおまねき申し上げ長者をそのお側近くへ導きますと、お釈迦さまは彼が座におろかなる身こそなかなかうれしけれ
弥陀のちかいにあうとおもえば

とは良寛さんの歌であります。私共は良寛さんがおろかな人とはちっとも思いませんが、かと云って上手にかしこく世渡りの出来る人でもなかったようです。しかしそのおろかさが、かえって念仏の道一筋になられ、弥陀の誓いをよろこばれたのでしょうか。

草の庵にねてもさめても申すこと
南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

良寛に辞世あるかと人問わば
南無阿弥陀仏というと答えよ

わたしにし身にしありせば今よりは
かにもかくにも弥陀のまにまに

極楽に我が父母はおわすらん
今日膝もとへ行くと思えば

山かげの岩根もり来る苔水の
あるかなきかに世を渡るかも

他力とは野中に立てし竹なれや
よりさわらぬを他力とぞいう

つくのを待ち受けられて、あたたかいお同情のこもったお言葉で話しかけ

「優婆塞（男の信者）よ、一人子を失って悲しんでおられるのか」

とおたずねになりました。彼が「ハイ、世尊よ」とやつとおこたえ申すや、お釈迦様はお言葉を続けられて

「ウバソクよ、古の賢者も子を失って悲しみに沈んでいたが、賢人の語を聞いて〃去ったものは再び得ることは出来ない〃という真理を知って、遂に悲しみから解脱した」

と仰せになって、遠い過去の世の出来事を次のようにお物語りになりました。

その昔、財産も豊かに権勢もあるバラモンの子が十五六才の若さで病気にかかってこの世を去り天上界に生れました。父はそれ以来歎き悲しんで仕事もせず、ただ墓地に行

って一塊の灰のまわりをウロウロさまよい歩いては涙にくれておりました。

天上界に生れた子はこの有様を見て、「何とかして父上の悲しみを取り去ってあげたいものだ」と願い、丁度父が墓地に来て泣いている時、身に立派な飾りをつけた少年の姿となってそこに現れ、両手を頭に載せて大声で泣き叫んでおりました。そこでバラモンの父はそれとも知らずにその声を聞きつけてその少年を見出し、非常に可愛く思って側に近づいて行って話しかけました。

「可愛い子だね。この墓地へ来て何を泣いているのか。キラキラとまぶしいほどに輝く耳環をかざり、花環をかけた体には香をたきこめているのに、こんな淋しい墓場に来て腕をあげて泣きくれているのは一体どんな悲しみがあるのかネ」

少年はこれに答えて

「黄金で作った車体はこれこの様に光る立派なのがあるけれど、肝腎の両方の輪がないのでどうすることも出来ないのです。悲しさにもう一層死んでしまおうと思います……」

と。これを聞いたバラモンの父は、いたく憐れに思って

「黄金、白金に宝の珠をちりばめた車輪をお前の欲しい通りにこしらえてあげよう」

と云いましたが、少年の云うには

「太陽と月があの大空に輝いています。私の黄金の車体の両輪には太陽と月に及ぶものはない、あれが欲しいのです」

バラモンはそれを聞くや否や

「何という愚か者だろう。いくら望んでも得られないとこれ程はっきり解り切っているものをお前は欲しがって得られなければ死んでしまおうとまで云っている。お前が日月を得ることは天地にあり得ぬのだから、命を捨ててもどうしようもないことだ」と。

この時少年の云うには

「バラモンよ、御覧なさい。日月の歩みはまだこの目に見ることが出来るではありませんか。それなのにあなたは永劫に見ることの出来ぬ死者を慕うて、命も絶えんばかりに歎いておられる。いずれの悲しみが愚かでありましょうか」

この言葉を聞いた時彼はハッと悟り

「若者よ、あなたは私に真実を語ってくれた。私の悲しみこそおろかであった。月を得ようとて子供が泣く様に私は去って帰らぬ死者を恋い悲しんでいた……」

かくて彼はここに悲しみから解脱し、この少年に感謝して次の讃歌を唱えました。

油を注がれし火の如く
われは燃えさかりたるを
水をもて注ぎかくるが如く
汝は我が苦を抜き去りぬ。

わが心に食い入りたる
箭をば汝は抜き去りぬ
われは悲しみに沈めるに
子ゆえの悲しみを打ち払えるは

これわが箭の抜かれしなり
われは悲しみなく憂いなし
若者よ、汝が語を聞きて
我れ悲しむなく憂うるなし。

そこで少年は、

「あなたが悲しんでおられる亡き子はこの私であります私は天界に生れております。今より後は決していたずらにお歎き下さいますな。どうぞ正しきみ法をきき開いて下さいませ」

と述べて天界へ帰って行きました。そして父バラモンも子の言葉の通りにひたすらにまことの道をおさめて行きました。

お釈迦さまは以上の御法話をなされてのち「この遠い世に法を説いたバラモンの子こそ、すなわち菩薩として道を修めていた自分であった」と仰せになりました。聞き終った時かの長者は悲歎の底から仏様のお慈悲によみがえって迷いの夢からさめたのでありました。

終り

めざめた人の慈悲

「頻死の老人も、明日にも奇蹟がおこって助かるかも知れないという希望を抱いて生きている。」

とパスカルは云う。私たち一人一人が大なり小なり明日に希望をかけている。希望の無いところに希望をかけているそれでなかったら多くの人は自殺してしまうかも知れないみんなが、いわば自分をだまして生きている、そうしなかったら自分の惨めさに堪えられぬだろう。

ただめざめた人だけが、人間の生活の惨めさ、不幸を恐れず直視する。偽瞞で自分を覆うことなく、人間の真の悲惨さを見きわめ、それを救うのはどうしたらいいか、ということを真剣に考える、この人によってのみ人々は心の灯火を与えられる。釈尊は正しくその人である。

慈光　第十九巻　第九号　昭和四十二年九月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

あとがき

本年の夏はことに身にこたえる暑さでありました。九月の涼風とともに夏ばての疲れを洗いおとされ、天高く馬肥ゆる秋を迎えましょう。すでに街の店頭に秋の味覚は飾られて心をひいております。

渋柿のしぶがそのまま甘さかな

と古人は申しましたが、幾度秋を迎えましても私共の煩悩の渋の強さしぶとさのはてしないことで、それにつけましても、この渋故にあらわれて下さる御本願のほどをいよいよ仰がせて頂くことであります。

○

今回は近角先生御病後の会館での御講話の筆録を頂きました。筆録して下さった山田太平様もすでに浄土にかえられましたが尊き御文を再録させていただきました。親鸞聖人が聖徳太子を父の如く、母の如く、或は和国の教主、観音の化身として渇仰せられましたが、近角先生もまた聖人と太子を無二の師として仰がれております。御味読下さい。

福島先生は今夏の酷暑に大変お弱りのように承りましたが涼風と共に御元気になられました。近角先生御著の信味を続いて頂きました。

北米の前田さんから「福島先生が観経について私共にも浄土の世界をこの世で感じ得るようわかり易く汽車で静岡を過ぎられる時お感じになったことからお話になりましたが、私も戦時中にたちのきでアーカンソ州に何も無い所を四五日かかって汽車でゆく時、丁度日没で天と地とが一面になって黄金色に見え、その中を汽車がつき進んで行く時この光景を何にたとえてよいかと長いこと考えておりました。その後何回もそんな思いをした事があります。今度の福島先生のお話で私にも観経のお浄土がすこし解らせて頂けてありがたく頂いております云云」とお礼状が参りました。

「夏の御文」は蓮如上人の八十四歳の御老衰も加わる日の御勧めで、悲心あふれるものであります。夏はすぎましたが、仰せ通り来年は期し難い人生でありますので思いきって出させて頂きました。又「念仏のかおる人々」というのは、念仏者を染香人と呼ばれますので、私自身がそうした篤信者の余香を身にうけて、心にのこるままに誌しました。

御案内

◎　毎月第一、二、三日曜。午后一時半。
　　一道会例会。
◎　毎月廿四日午前午后、
　　教西寺法話会。

定価　半年　二百円（送共）
　　一年　四百円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫
　　電話八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　本田政雄
発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
　　振替口座名古屋一〇四七〇番